

東ティモール独立後に制作された作品

亀山 恵理子

1. 東ティモールの映画事情

東ティモールは2002年に主権を回復し、正式に独立した新しい国である。長年ポルトガルの植民地支配下にあったが、1975年12月に隣国インドネシアが軍事侵攻し、以来東ティモールは約24年間インドネシアの実効支配下におかれた。1998年に長年続いたインドネシアのスハルト政権が退陣すると、東ティモール問題に動きがみられた。1999年8月に独立の是非を問う住民投票が行われ、その後約2年半の国連による暫定統治を経て東ティモールは独立国家となった。

そのような歴史をもつ今日の東ティモールにおいて、映画産業が存在しているとは言いがたい。インドネシア軍が撤退した1999年9月以降、東ティモールは独立に向けた国の枠組みづくりと住民の生活再建を同時にすすめてきた。その過程では経済や医療・保健、教育、水衛生、インフラ整備などが優先分野となり、映画を含む文化にはこれまであまり力が注がれてこなかった。映画の制作や普及に対する政府の支援はまったくないわけではないが、不定期であり極めて限られている。また、映画制作に必要な技術をもつ人材は非常に少なく、撮影後の映像編集や音楽制作などポストプロダクションを行うための施設も国内には少ない。作品を見せる場である映画館は、首都デシリに1館あるのみである。

東ティモールに関する映画や東ティモールを舞台とした映画は、独立以降ほとんどが外国の映画制作者やジャーナリストによってつくられてきた。東ティモールの関係者と協働して、外国の制作者が東ティモールの歴史や物語を表現する作品を生み出してきた。財源が限られる中、映画制作にかかわる人たちは熱意とコミットメントでもって作品をつくり出してきたといえるだろう。近年は、東ティモールの映画制作者らがより中心的な存在となった、東ティモール初の長編映画がつくられている。以下では、独立以降に制作された東ティモールについての映画作品をド

キュメンタリー映画と長編劇映画にわけて紹介する。また、その中の一作品である東ティモールの長編映画『ベアトリスの戦争』について、作品制作の背景などを追加情報として記しておきたい。

2. 東ティモールについてのドキュメンタリー映画

独立以降につくられた東ティモールについてのドキュメンタリー作品は、ほとんどすべてが外国の映画制作者によってつくられている(資料1)。主な作品として、東ティモールの独立にいたる闘争や苦難の歴史(作品3、4、6、7、8)、1999年の住民投票を前に生まれた社会の亀裂と修復(作品2)、1999年以降を東ティモールの人がどのように生き抜いているか(作品1、5)を描いたものがある。東ティモールの独立にいたる闘争や苦難の歴史を描いた作品においては、東ティモールの自決権行使を支援する国際連帯運動の活動家に焦点をあてた作品が含まれる。また、『カンタ！ティモール』は東ティモールの苦難の歴史を辿っているが、他の作品とは異なり、東ティモールの人びとの生死や自然との関係に関する世界観にも触れている点が特徴的である。

3. 東ティモールを舞台とした長編映画

ここ数年の間に、東ティモールに関する、あるいは東ティモールを舞台とした長編の劇映画も作られるようになった(資料2)。ドキュメンタリー映画と同様に長編劇映画も外国の制作者によって作られていたが、2013年には東ティモール制作の最初の作品『ベアトリスの戦争』(作品4)が発表されている。

2009年に制作された『バリボ』(作品1)は、インドネシアが東ティモールに侵攻する前に、オーストラリアのテレビ局関係者が東ティモールの国境に近い町バリボで、インドネシア軍によって殺害された事件を題

資料1 ドキュメンタリー映画作品リスト(2002年以降)

- 1 『East Timor: Birth of a Nation(東ティモール—国家の誕生)』ルイギ・アキスト監督、オーストラリア、56分、2002年
二人の東ティモール人を描いた2編の映像から構成されている。一人はローザという名前の東ティモール人女性であり、困難な中でも子どもに教育を受けさせるために力強く生きる姿が描かれる。もう一人は20年間抵抗運動に身を投じていたル・オロである。独立後初の選挙に出馬し、ゲリラから政治家への移行期にある姿が描かれる。
- 2 『Passabe(パッサベ)』ジェームス・レオン監督、リン・リー監督、シンガポール、110分、2004年
東ティモールの飛び地であるオイクシ島のパッサベが舞台。1999年の住民投票後に統合派民兵による暴力が吹き荒れ、74人の犠牲者が出た。映画では、それから5年後に被害者と加害者を含むパッサベの住民が当時の出来事に向き合う過程が記録されている(日本におけるシンポジウムでの邦題は「パッサベの虐殺—東ティモールの正義と和解」)。
- 3 『Dalan ba Dame(平和への道)』CAVR、東ティモール、83分、2005年
ポルトガル時代から1999年にいたる東ティモールの激動の道のりを、インタビューをもとに描いた作品。証言部分は普通の人によるものであり、苦難と闘いの経験が記録されている。CAVR(受容真実和解委員会)は、東ティモールの元政治囚協会の働きかけと国連暫定行政からの後押しを得て2001年に設立され、1974年から1999年における人権侵害の調査を全国的に行った。
- 4 『Where the Sun Rises(ここに陽はのぼる—東ティモール独立への道)』
グレース・パン監督、シンガポール・東ティモール、78分、2006年
抵抗運動のリーダーであり、初代大統領に選ばれたシャナナ・グスマンのナレーションで独立までの道のりを辿る。カメラは、山中で、また投獄後は刑務所からインドネシア占領に対する抵抗運動の指揮をとったシャナナの姿を追う。シャナナは、国を建設していくにあたって植民地支配や占領という苦難を乗り越え、許しと和解を提唱する指導者として描かれる。
- 5 『Rosa's Journey(ローザの旅)』ルイギ・アキスト監督、オーストラリア、52分、2008年
一時期騒乱に陥った2006年から独立後初の国会議員選挙が行われた2007年にかけて撮影された。ルイギ監督は、オーストラリアの映像制作会社と共同で数年前に取材した東ティモール人女性ローザのその後を追った。ローザは、紛争と貧困によって奪われた教育の機会を子どもに与えるために日々闘う。先行きが見えない中で子どもを一人で育て生きていくローザの姿が描かれる。
- 6 『Bloodshot: The Dreams and Nightmares of East Timor(血飛沫—東ティモールの夢と悪夢)』
ピーター・A・ゴードン監督、オーストラリア、120分、2012年
ゴードン監督とテレビドキュメンタリーの取材で1991年に東ティモールを訪れ、その後東ティモールの自決権実現のための連帯運動にかかわるようになった2名の人物を取り上げている。そのうちの一人マックス・スタールはサンタクルス事件の現場を撮影したジャーナリストである。マックス・スタールは、現在東ティモールに移住し、音声映像の収集、整理、保存と新たな映像制作に取り組んでいる。
- 7 『Alias RUBY BLADE(別の名をラビィ・ブレイド)』アレックス・メリエール監督、オーストラリア、75分、2012年
東ティモールの抵抗運動のリーダーで、独立後は大統領と首相を務めたシャナナ・グスマンの妻、カースティの自伝的映画である。オーストラリア出身のカースティはインドネシア時代に東ティモールの抵抗運動を支援しており、住民投票後にシャナナと結婚した。独立後は、東ティモールで女性と子どもの権利促進に取り組むNGOを主宰している。
- 8 『カンタ! ティモール』広田奈津子監督、日本、110分、2012年
東ティモールを旅しながら撮影した映像をもとに、大地とともに生きるという視点から東ティモールとそこに暮らす人びとを描いている。東ティモールの人びとへのインタビューでは、インドネシアの実効支配下における苦難の歴史も語られる。上映が開始されて3年以上経つが、現在でも連日のように日本のどこかで自主上映が行われている。

資料2 長編映画作品リスト(2002年以降)

- 1 『Balibo(バリボ)』ロバート・コノリー監督、オーストラリア、90分、2009年
1975年のインドネシアによる全面侵襲に先立ち、インドネシア軍とそれに率いられた東ティモール人の民兵部隊が国境に近い町バリボを攻撃した。この一件を取材しようとしたオーストラリアのテレビ局スタッフ5人が攻撃中に殺された事件を題材にしている。インドネシア政府は、事件は「銃撃戦に巻き込まれて死亡した偶発的出来事」との見解を示しており、2009年12月に本作品の国内上映禁止を決めた。
- 2 『맨발의 꿈(『裸足の夢』)キム・テギョン監督、韓国、121分、2010年
住民投票後の東ティモールに一攫千金を夢見てやって来た韓国人の元サッカー選手が、新天地を求めて東ティモールにたどり着く。だがうまくはいかず、帰国を考えていたときにボールを蹴る子どもたちの姿を目にする。子どもたちにサッカーを教えて、チームが1年足らずで世界大会に出場して優勝したという実話にもとづいて制作された。首都ディリのほか、世界大会会場となった広島でも撮影が行われた。
- 3 『Atambua 39 Celcius(『ティモール島アタンブア39℃』)リリ・リザ監督、インドネシア、90分、2012年
住民投票前後に西ティモールへ移動し、そこに残る家族を描いている。東ティモールとインドネシアの国境の町アタンブアに暮らす父と子が主人公。母と弟は東ティモールに暮らしており、息子は、東ティモールはもう安全だから心配せずに帰っておいでと呼びかける母から送られた声のテープを聴いている。父親は東ティモールにいた時に人を殺した様子で、以前住んでいたリキサに戻れないでいる。
- 4 『Beatriz's War(ベアトリスの戦争)』ルイギ・アキスト監督、ベティ・レイス監督、東ティモール、101分、2013年
東ティモールの最初の長編映画。インドネシア軍による全面侵襲以降、実質的にインドネシアの支配下におかれていた東ティモールにおいて占領が女たちにどのような影響をもたらしたのかが描かれる。主人公の夫は虐殺を逃れたものの行方知れずになり、住民投票後に姿を見せる。作品には、1983年に起こった「クララスの虐殺」で家族を失った女たちがエキストラで出演している。

材にしている。いわゆるバリボ事件である。オーストラリア政府は殺害に関するインドネシア軍のやりとりを事前に把握していたと推測されているが、「バリボの死」と呼ばれる事件の真相ははまだ究明されないままであり、オーストラリア人ジャーナリストたちは執拗に事件を追いかけている。

2010年に制作された『裸足の夢』(作品2)と、2012年に制作された『ティモール島アタンブア39℃』(作品3)は、東ティモールが独立してからの時代を描いている。『裸足の夢』は、独立後に東ティモールにやってきた韓国の元サッカー選手が子どもたちにサッカーを教え始め、子どもたちのサッカーチームが国際大会に出場して優勝するという実話にもとづくストーリーである。貧困による家族の問題や、占領がもたらした社会の亀裂を乗り越えながら、子どもたちは夢を実現していく。サッカーチームの子どもたちが映画の中では自分たち自身を演じている。この映画が制作されるまでは、東ティモールについての映画は闘争の歴史や過去の人権侵害に関するものがほとんどだった。『裸足の夢』は、それまでの東ティモールに関する映画とは異なる物語を描いた作品である。

一方、『ティモール島アタンブア39℃』は、1999年の住民投票前後の騒乱時にインドネシアとの国境の町アタンブアに移動し、そこに留まる父と子を描いた作品である。1999年の住民投票前には、東ティモール人の統合派民兵組織が各地に作られた。インドネシア軍はそれらの民兵組織を使って、住民投票後には焦土作戦を展開し、東ティモールの全土で放火や略奪、殺害が行われた。当時民兵だった人の中には、現在も西ティモールなどインドネシア領に留まり、報復を恐れて東ティモールへ帰っていない人もいる。映画の主人公の父親はそのような元民兵である。この作品でも、東ティモールの一般の人が演じている。主人公の青年とその父親は、1999年以降アタンブアで暮らす東ティモールの人である。

4. 『ベアトリスの戦争』の制作について

すでに述べたとおり、独立後の東ティモールでは外国の映画制作者によって作品がつくられてきたが、2013年には東ティモール制作による初の長編劇映画が生まれた。『ベアトリスの戦争』は、東ティモールのベティ・レイス監督とオーストラリアのルイギ・アキスト監督の2人が共同監督を務めた作品であり、主に

インドネシア占領時代から住民投票後の一時期を描いている。

ベティ・レイス監督は、独立後の数年間、「ビビ・ブラック」(狂った山羊)という劇団で役者、作家、舞台監督として活動していた。ベティ監督は、劇団のメンバーであり『ベアトリスの戦争』でヒロインをつとめた役者イリム・トレンティーノとともに、映画『バリボ』(長編作品1)の撮影現場にエキストラやそのキャスティング担当として参加した。その際に、『ベアトリスの戦争』で共同監督を務めることになるルイギ・アキスト監督と出会っている。ベティ監督は、その後2010年に「デイリ・フィルム・ワークス」という東ティモールで最初の映像制作会社を共同で立ち上げた。「デイリ・フィルム・ワークス」は、東ティモールにおいて持続可能な映画・テレビ産業を確立することを目的としている。映画制作を現場で学びながら、他のメンバーとともに『闘鶏』、『タイス市場』、『サルバドール』、『放浪者』、『あら探し』の5本の短編映画を制作した。それらの作品は、オーストラリアのブリスベン国際映画祭、インドのプネー短編映画祭などで上映されている。

もう一人の監督であるルイギ・アキスト監督は、1986年から映像制作者として活動し、20年間で30本の短編作品を制作している。冷戦後のヨーロッパにおける移民問題や、東南アジア大陸部からオーストラリアへの人身売買などもっばら社会問題を取り上げてきた。1999年の住民投票後から東ティモールでの取材をはじめ、ドキュメンタリー作品を2本発表している(ドキュメンタリー作品1および5)。また、東ティモールでの撮影と映像制作を通じて撮影する側と撮影される側の関わり合いについて一層考えるようになり、2010年には映像制作会社「フェア・トレード・フィルム」を設立した。「フェア・トレード・フィルム」は、ドラマやドキュメンタリー作品の制作を行うほか、次世代映像制作者のための研修を行っている。ベティ監督を含む研修の参加者らが先述のデイリ・フィルム・ワークスを設立した。

『ベアトリスの戦争』の制作費用約2億円は、国内外の映画制作関係者やスポンサーのほか、大統領府、観光省など東ティモール政府内のいくつかの組織からの資金提供、およびグローバル・フィルム・イニシアティブからの助成金によってまかなわれた。グローバル・フィルム・イニシアティブとは、サンフランシスコに本部をおく非営利団体で、文化間の理解を深めることを目的に主に途上国の映画制作に対して助成を

行っている。また、資金に加えて現物出資での協力があつたほか、東ティモール国軍は武器や制服を映画撮影のために貸し出し、エキストラでも協力した。撮影クルーは、総勢約70人でうち60人以上が東ティモール人だった。東ティモール人のほかに、監督を含めて東ティモールと長くかかわりをもつオーストラリア人4人が加わった。つまり、『ベアトリスの戦争』は東ティモールの人の多くの参加により作られた作品である。

映画の中では、クララスにおける虐殺の様子が描かれており、そのシーンの撮影においてはクララスに暮らす人たちがエキストラで出演している。「クララスの悲劇」として知られる虐殺事件は1983年に起こり、事件当時は200人以上がインドネシア軍によって殺されたといわれている。ベティ・レイス監督によると、クララス出身のエキストラは、虐殺がどのように行われたのかを撮影クルーに説明したという。撮影に参加した人の中には、当時拘束される前に逃げ出したものの夫や息子、兄弟など家族を殺された女性たちもいた。だが、映画の中で演じることを人びとは希望したという。また、虐殺シーンの撮影では、主演女優は撮影後に泣き崩れ、エキストラの男性たちは涙を流し始めたそう。ベティ監督は、虐殺シーンの撮影は、関係者の気分を沈めさせ、苦痛を与える経験だったというが、当時を生き抜いた女性たちの誇らしげで反抗的な表情は凛々しいものだったとも述べている。

『ベアトリスの戦争』はインドやオーストラリアで開催された国際映画祭で上映され、インド国際映画祭(2013年)では最優秀賞を受賞した。インドネシアでは2013年にジョクジャカルタで開催されたNETPACアジア映画祭において上映された。東ティモール国内においては、「シネマ・ロロサエ」という野外映画上映を行う東ティモールの団体が、オーストラリアの劇場と東ティモール政府から資金援助を受け、監督らとともに作品を上映してまわった。インドネシアとの国境に近い東部の町マリアナでは1回の上映に4,000人が集まったという。東ティモール全体ではこれまでに10万人以上の人々が『ベアトリスの戦争』を鑑賞したと見積もられている。

亀山恵理子(2015)「映画紹介『ベアトリスの戦争 (Beatriz's War)』」『季刊東ティモール』(大阪東ティモール協会発行)第56号、24頁。

亀山恵理子「東ティモールの映画事情」(混成アジア映画研究会[於・国際交流基金]における研究会報告資料、2015年7月31日)。

ベティ・レイス「東ティモールの映画産業について」(国際短編映画際「ショートショートフィルムフェスティバル&アジア」と国際交流基金アジアセンターによる東南アジアの短編映画上映とシンポジウムに関するウェブサイト) http://www.shortshorts.org/southeast_asia/column-timor-leste/(最終閲覧日:2015年10月20日)